

明石の史跡（21）橋本関雪の玉垣



神社（二見町東二見1323）を散策し、先日、所用により御厨っていたところ、思いもかけず、橋本関雪の玉垣（皇居・神社の周囲に設ける垣＝広辞苑）が視界に飛びこんできた。昭和9年（1934）5月の、社殿葺き替えに際し、関雪は「金百円」を奉納している。この年は東北冷害・西日本旱害に続く、室戸台風（9月21日）の災害などにより、明治43年（1910）以来の凶作に見舞われた大変な年であった（農林省統計表／年表日本歴史6）。

社伝によれば、御厨神社は「神功皇后の三韓出兵のおり二見浦に船を休ませ、兵糧を集めたことから社名を御厨と称したという。長暦年間（1037－40）に東二見と西二見の境にあった卯の花の森に移り、君貢（きみつぐ）神社から八幡宮と天満宮を遷座、この頃より二見の鎮守となった」といわれる（兵庫県の地名Ⅱ、149頁）。『播磨艦』には天満宮と記され、御朱印社領は40石とある。関雪は、明治16年（1883）神戸生まれ。父は旧明石藩の漢学者で、『明石名勝古事談』の著者。画才は父の影響といわれ、同41年（1908）文展に初入選以来、大正7年（1918）には「寒山拾得」「倪雲林」「木蘭」が連続特選を獲得し、注目を集める（国史大辞典11）。

関雪と御厨神社を結びつけたものはなんだろうか。神社の東南400メートルのところに、地元の人達が「関雪さんの別荘」と呼んでいた「白沙荘」（播磨灘に面した高台の景勝地に建てられ、現在は民間企業の所有に帰している）があり、こうしたことから、玉垣奉納に結びついたものだろうか。筆者の義兄（昭和8年生）は、幼少期にこの別荘の庭で遊んでいたところ、関雪本人に3度ほど対面した経験をもっており、避暑には利用されたものであろう。



御厨神社玉垣